

学術論文でノダ文は どのように用いられているのか

清水 まさ子

◆要旨

本稿は学術論文においてノダ文が「どのように用いられているのか」について調査したものである。ノダ文の位置を調査したところ、段落の最終部に出現が最も多いが、段落中に出ることも少なからずあることが分かった。この段落の最終部のノダ文は段落の締めくくりを行う機能を持っていた。締めくくりのノダ文は、その直前の助詞「ハ」を伴う名詞句をノダ文の主題とするのではなく、それ以前（例えば段落の冒頭）に書かれている表現に助詞「ハ」を伴わせたり、また前文までの内容とつながりを持たせつつ、それまでの内容をまとめている場合があることが分かった。このようなノダ文は学術論文の中でも、論証型論文を書く場合には活用できると考えられる。

◆キーワード

学術論文、ノダ文、ノダ文の位置、主題、論文のジャンル

◆ABSTRACT

This paper examined how the “Noda” sentence construction is used in academic papers. Examination of where the “Noda” construction was located revealed that it most often appeared at the end of a paragraph, but in a number of cases it also appeared within a paragraph. A “Noda” construction at the end of a paragraph serves to finish the thoughts or points raised in that paragraph. The topic of a closing “Noda” construction is not the topic of the sentence immediately before; rather, the sentence draws on previously utilized wording, e.g. like that at the start of the paragraph. Thus, such a sentence draws on previously utilized wording. When writing a literature-based paper, the Noda construction can be utilized effectively.

◆KEY WORDS

academic papers, “Noda” construction, position of “Noda” construction, topic, type of the academic paper

How is the *Noda* Sentence Construction Used in Academic Papers?

MASAKO SHIMIZU

1 はじめに

本稿は今まで機能に関する記述が中心であったノダ文を調査対象に、実際に学術論文において「どのように用いられているのか」について調査したものである。ノダは主観性が強いと認識されていることもあり、レポートや論文などでその使用を控えるように述べられていることもある（佐藤他1986）。

しかし、実際に様々なジャンルの論文やレポート等で使用されているノダ文について量的な調査を行った研究は管見の限りなく、ノダ文の使用を制限する注意が全てのジャンルの論文にあてはまるのか分からない。

そこで本稿では学術論文を調査対象にし、ノダ文が用いられているのかどうか、もし用いられているとしたらどのように用いられているのかについて調査し、論文やレポートを書く日本語学習者に対して、ノダ文使用に関する提言を行うことを目的とする。

2 先行研究

ノダに関しては多くの先行研究があり、その中心的機能の記述について様々な議論がされてきたが（山口1975, 田野村1990）、ノダの機能の記述を大きく整理したのは野田（1997）であろう。野田はノダ構文には「スコープのノダ」と「ムードのノダ」の2つの機能があると説明した。

これらのノダの記述に対して庵（2000）は、日本語教育を行う側から見た場合、今までのノダ文の研究では不十分であるとし、産出する側に立ったノダに関する記述が必要であることを述べ、野田（同上）の「スコープのノダ」に対して修正を行った。また石黒（2001）も、産出的な側面から見たノダの中心的機能について述べている。

3 本調査の目的と調査項目

ある文法事項の機能を記述することは、その文法事項を理解する上で非常に

重要であると思われる。しかし太田（2009）が言うように、文法事項は「どんな意味か」が分かっても、「どのように使うか」という言及がなければ、たとえ産出するためのノダ文の機能が特定されたとしても、学習者が実際に産出することは難しい。

そこで本稿では、論文の中でノダが文末に用いられている文（以下ノダ文と呼ぶ）が「どのように使われているのか」、日本語学習者に具体的に提示することを目的に、以下の3つの調査項目を設定した。

〈①出現位置の調査〉

ノダは意味段落のまとまりの最後に出ることが多いことが既に述べられている（霜崎1981, 田野村1990）。しかし、実際に調査した霜崎では『雁』という小説のみを対象としており、ノダの用例数が少ない。これを一般化してノダは段落末に来ることが多いと述べるのは危いのではないか。そこで本稿では再度、段落におけるノダ文の位置を実際に調べる。

〈②ノダ文の前後の文とノダ文の主題はどのように連なっているのか〉

先述したように、今までノダの機能に関して様々な研究が行われてきたが、その反面、ノダの命題部分と前後の文との関わりについては、それほど注目されてこなかった。

例えば、次の2例がある。

A) 花子は泣き出した。花子は、何もかも終わりに思えたのだ。

B) 花子は泣き出した。テストはもう終わっていたのだ。

A) のノダ文は、先行文と同じく「花子」がノダ文でも主題として提示されているが、B) のノダ文は、「テスト」が主題に来ており、先行文との間で主題は連続していない。野田（1997）でいえば、どちらも「関係づけの対人的ノダ」であると考えられ文法的におかしくはないが、ノダ文の主題が両者では異なる。

ノダ文と先行文との主題に関する調査は既に行われているが、それは先行文とノダ文が同一主題の場合のみを調査対象としていた（清水佳子1997）。この調

査によって、先行文とノダ文が同一主題の場合、後文の主題は省略されることが多いということが明らかにされたが、そもそも先行文とノダ文の主題は同一の場合が多いのであろうか。また同様にノダ文と後文との主題の関係はどのようになっているのであろうか。

本稿では、ノダ文とその前後の文の主題に着目し、それらがどのように連なっているのか調査する。まともあるテキストを書く際に、このような主題の連続に注目することも、文章を結束させる上で必要な観点だと考えられる。

〈③論文のジャンルに着目した調査〉

現在、ジャンルの異なる文章・談話中では、そこに出てくる文法項目や表現が異なるという結果が出てきている(清水まさ子2006)。しかしノダに関しては、どのようなジャンルで出現するのか調査したものはあまりない。論文やレポートには不適切であるとされるノダ文であるが、それはどの論文のジャンルでも同じなのであろうか。そこで本稿では、論文のジャンルとノダの出現について、両者は関係しているのか調査を行う。

4 調査方法

4.1 調査対象テキスト

今回は人文系論文に絞り5分野、1種類につき10編、計50編を調査対象とした。調査対象の選定については『学会名鑑』(2004)を用いて、「人文科学部門」に分けられている分野からそれぞれ会員数が最も多い学会を選びだし、その学会が刊行している学術雑誌を選んだ。また2007年4月時点で最新の論文から選んだ。今回の調査では、「研究ノート」や「書評」は対象にしない。以下は論文の詳細である。

- 『国際政治学研究』(国際政治学会)、『英文学研究』(英文学学会)
- 『現代経済学の潮流』(日本経済学会)、『考古学研究』(考古学研究会)
- 『心理臨床学研究』(日本心理臨床学会)

4.2 調査対象にしたノダ文

今回調査対象とした文は、文末が「~のだ」または「~のである」のみであり、全部で382例あった。「~のだろう」や「~のだろうか」などは、調査対象に含めなかった。

4.3 調査方法

まず①ノダの出現する位置、②ノダ文と前後の文の主題の関わりあい、③ノダが出現する論文のジャンル、についてそれぞれ調査を行う。そして最後にこれらの調査を合わせて、学術論文を書く日本語学習者に対してノダ使用に関して提言を行う。

5 結果

5.1 ノダ文の出現位置

まず論文内で、ノダ文はどこに出現しているのか調査を行った。

段落内のノダ文の位置を数値化して表し、表1、表2にまとめた。表1は1文から5文までで構成されている段落内で、ノダ文が何文目にあるかを表したものである。また表2は総文数6文以上の段落を対象に、1つの段落の冒頭から段落末までを100%と考え、それぞれ何文目にノダ文がくるのか数値化したものである。例えば1段落が10文で構成され、2文目にノダ文が出てきた場合、その位置は20%と示す。

表1 ノダ文は段落の中でどこに位置するのか(5文以下)

出現位置	総文数									
	1文	2文		3文		4文		5文		
1文目	2	3	12.5%	0	0.0%	1	1.9%	0	0.0%	
2文目		21	87.5%	6	17.1%	10	18.9%	9	15.5%	
3文目				29	82.9%	18	34.0%	7	12.1%	
4文目						24	45.3%	12	20.7%	
5文目								30	51.7%	
合計	2	24	100%	35	100%	53	100%	58	100%	

表2 ノダ文は段落の中でどこに位置するのか (6文以上)

段落の冒頭からの位置	用例数	割合
0%~20%	4	1.9%
21%~40%	16	7.6%
41%~60%	30	14.3%
61%~80%	31	14.8%
81%~100%	129	61.4%
合計	210	100%

表1を見ると、段落中の総文数が2文、3文の場合、最終段落にノダ文が位置するのは87.5%、82.9%であり、ほとんどが段落末に位置していると言える。総文数が4文、5文になると最終文に位置するのは45.3%、51.7%となる。6文以上の段落では段落最終部(81%~100%)に位置するのは61.4%である。このことから段落内のノダ文の位置は、段落内の文数が多くなるにつれて全体に分散していると言える。しかし、総文数が4文の段落以外、ノダ文が段落最終部に位置するのは過半数を占めており、段落内におけるノダ文の位置は、最終部に大きく偏っていることが分かった。

5.2 ノダ文と前後の文との主題の連なりについて

5.2.1 ノダ文と前後文における主題「ハ」の出現率

ここでは先行文からノダ文、そしてノダ文から後文へ主題はどのように連なっているのかについて調査した。この調査ではまず、ノダ文の前文・ノダ文・ノダ文の後文それぞれにおいて、主題を表す助詞「ハ」はどのくらい現れているのかを見た。今回の調査では、主題「ハ」が顕現する場合のみを「ハ」が現れる場合」とした。その結果が以下の表3^[註1]である。

表3 文中に「ハ」が現れる場合

	前文		ノダ文		後文	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
「ハ」が現れる場合	290	75.9%	235	61.5%	232	69.3%
「ハ」が現れない場合	92	24.1%	147	38.5%	103	30.7%
合計	382	100.0%	382	100.0%	335	100.0%

前文で主題「ハ」が現れる場合が75.9%、ノダ文で現れる場合が61.5%、そして後文で主題が現れる場合が69.3%と、どの文でも主題「ハ」が実際に現れる場合は過半数を超えていることが分かった。

5.2.2 ノダ文と前後文における助詞「ハ」の連なり方

次に、前文→ノダ文とノダ文→後文において、主題を表す助詞「ハ」は連なっているのか、もし連なっていないのなら、他にどのようなパターンで連なっているのか調査した。それが以下の表4と表5である。

表4 前文→ノダ文における主題/主語名詞句の連なり

前文 \ ノダ文	ハ	モ	ガ	省略	その他
ハ	184	18	45	41	2
モ	12	0	3	4	0
ガ	22	1	10	1	2
省略	17	4	7	7	1
その他	0	0	1	0	0

表5 ノダ文→後文における主題/主語名詞句の連なり

後文 \ ノダ文	ハ	モ	ガ	省略	その他
ハ	141	14	40	37	0
モ	13	0	8	1	2
ガ	26	1	3	6	1
省略	21	5	7	7	0
その他	2	0	0	0	0

これらを見ると、ノダ文の前文・後文にかかわらず助詞「ハ」がある場合、ノダ文にも助詞「ハ」がある場合が最も多いことが分かった。

つまり以下の(1)のように助詞「ハ」が連なる場合は多いが、(2)のように「ハ」が連なっていない場合は、文法的に問題がなくとも、(1)より少ないということが言える。

- (1) 今回のSITは、あくまでクライアントの希望に沿う形で行われた。だからこそクライアントは真剣にセラピーに取り組み、上述したようなスキルの獲得と認知様式の再構成に成功したのである。(心理学)
- (2) しかし、日本経済は1998年からデフレ経済下にあり、消費税増税の物価引上げ効果を除去して考えれば、1995年からデフレ下にあるといえる。デフレが10年近く持続しているのである。(経済学)

それでは助詞「ハ」が連なる場合、同様にそれに伴う名詞句は、どのように連なっているのでしょうか。前文及び後文の助詞「ハ」に伴う名詞句とノダ文の主題「ハ」に伴う名詞句が、同一であるか異なるかを調査した。

表6 「ハ」に伴われる名詞句が、同一であるか異なるか

	前文→ノダ文		ノダ文→後文	
	件数	割合	件数	割合
同一	26	14.1%	8	5.7%
一部同一	42	22.8%	29	20.6%
異なる	116	63.0%	104	73.8%
合計	184	100.0%	141	100.0%

調査の結果、最も多かったのは前文・後文ともにノダ文の助詞「ハ」に伴われる名詞句と異なる場合であり、前文とノダ文の間では63.0%、そしてノダ文と後文の間では73.8%&が異なっていた。これは助詞「ハ」が連なる場合、前述の例文(1)のように、それに伴う名詞句は異なる場合は多いが、以下の(3)のように同一名詞句の場合は少ないということである。

(3) しかし大戦後、「ソ連超大国を中枢とする一大勢力圏」の出現を前にして、神川はついに「五十年前のマッキンダーの予言」が的中したと感じたのである。以後の神川は俄然マッキンダーに注目し始める。(政治学)

以上、これまでノダ文とその前後の文との主題の連なりについて見てきたが、この調査によって、ノダ文と前後の文では主題を表す「ハ」が現れる場合が多く、その「ハ」は前文→ノダ文、ノダ文→後文という文の連なりにおいては、どちらにも現れているケースが多かった。しかし、それらの助詞「ハ」が伴う名詞句は同一ではなく、異なっていることが分かった。

5.3 論文のジャンルとノダ文との関係

論文のジャンルを二通他(2008)を基に「検証型論文」「論証型論文」「複合型論文」の3ジャンルに分けた。これらの分類基準は以下のように定めた。

〈検証型論文〉…著者による調査・実験を含んだ論文をこのタイプとした。構成は「序論→方法→調査→考察(議論)型」という、いわゆるIMRAD型の論文である。

〈論証型論文〉…著者による調査・実験を含んではいない。文献や資料を基に論述される。論文は異なるトピックが連なって論が展開されており、IMRAD型ではない。

〈複合型論文〉…①IMRAD型ではあるが、研究手法が調査・実験ではなく資料や史料を用いた調査である場合。
②異なる節が連なる論証型ではあるが、図表の提示や史料の提示がなされ、それについて、考察がなされている場合。

上記の3ジャンルに基づいて、調査対象である50編の論文を分類した。その結果、次のように分けることができた(表7)。

表7 分野ごとにおける論文のジャンル

	論証型論文	複合型論文	検証型論文
政治学	9	0	1
英文学	10	0	0
経済学	4	4	2
考古学	1	6	3
心理学	0	0	10
合計	24	10	16

表8 論文のジャンルとノダ文の用例数

	論証型	複合型	検証型
総文数	4583	2691	3511
ノダ用例数	288	59	35
ノダの割合	6.3%	2.2%	1.0%

総文数	4583	2691	3511
-----	------	------	------

50編中、論証型論文は24編、検証型論文は16編、複合型論文は10編であり、今回、最も多かったのは論証型論文であった。また英文学系と政治学系では論証型論文がほとんどであるのに対し、心理学系は10編とも検証型論文と、論文の分野ごとに論文のジャンルに偏りが出ていることも分かった。

次に、上記の3つのジャンルとノダ文の用例数との関係は、表8のようになった。今回、ノダ文は全部で382例あったが、表8を見ると、論文のジャンルごとに出現率が異なることが分かる。最もノダ文の出現率が高いのは論証型論

文であり6.3%、次が複合型論文で2.2%、最後に検証型論文で1.0%と続いた。論証型論文におけるノダ文の出現率は検証型論文の約6倍であり、ジャンルによってかなり出現率に差があることが分かった。

6 考察

以上の調査結果から、次の点を考察する。

- ①論文におけるノダ文は、段落最終部に多く出現していることが分かった。またノダ文の主題とその前後文の主題は交替することが多かった。それでは段落の最終部に出現し、主題を表す助詞「ハ」が交替する場合のノダ文は、どのように用いられているのであろうか。この最終部のノダ文の用法が他の場所にあるノダ文と比べて特徴的なのかどうかを調べるために、中間部に出現するノダ文の用いられ方も比較のため考察する。
- ②論述タイプの調査から、ノダ文は論証型論文で用いられることが多いということが分かった。それでは、どうして論証型論文で用いられることが多いのであろうか。①で考察したことと併せて、ノダ文が論証型論文に用いられる理由を考察する。

6.1 ノダ文の段落における出現位置と主題交替との関係

今回考察対象としたのは表1、表2における総文数3文及び総文数5文の段落、そして6文以上を含む段落に属するノダ文である。なぜなら今回は段落の中央に位置するノダ文も比較のため考察しようと考えたからである。よって総文数2文や総文数4文の段落、及び6文以上の段落の冒頭から21%～40%、61%～80%に位置するノダ文は考察の対象としなかった。用例数は全96例であった。この調査に合わせて、段落末のノダ文の考察もこれらの用例を用いて行う。

6.1.1 段落の最終部に位置するノダ文の働き

段落最終部に位置するノダ文の用いられ方について、助詞「ハ」に率いられ

る名詞句の連なりを中心に見ていく。ここではノダ文の助詞「ハ」に率いられる名詞句が前文の中にもある場合と、ノダ文の助詞「ハ」に率いられる名詞句が前文の中にもない場合とに分けて、それぞれの段落末のノダ文の用いられ方を具体的に見てみる。用例数は、ノダ文の助詞「ハ」に率いられる名詞句が前文の中にもある場合は50例、ない場合は44例であり（不明2例、約半数ずつの出現となった。

6.1.1.1 ノダ文の助詞「ハ」に率いられる名詞句が前文の中にある場合

このノダ文は、具体的に次のような用例が見られた。

- (4) (中略) 感受性文学自体、経済、社会、ジェンダーの問題を抱え込んだ大きな文化的・政治的イデオロギーに支えられている。(中略) 慈善をテーマにした『メアリー』も必然的に政治的意義を付与されていることになる。(中略) メアリーの物語は、(中略) 慈善運動を通じて自らの社会的役割を獲得しようとした同時代の女性たちの状況にも呼応する。財産維持のための政略結婚に抵抗しながらも、嫌悪する夫を拒否すれば経済的存立基盤の喪失、そして慈善家としての自己定義の崩壊に到ることに怯え続けるメアリーは、(中略) 18世紀末の女性たちの存在の不安をも反映しているのだ。 (英文学)
- (5) したがって、デフレは貨幣的現象である。少なくとも(中略) デフレに対する責任の少なくとも半分は貨幣の側にある。構造政策や財政政策は、デフレに対する金融政策の働き方を強める触媒としては働きうるが、結局は貨幣と物との関係に行き着かない限りデフレは解決しない。その意味で、デフレに対抗できる政策は究極には金融政策なのである。 (経済学)

(4) は、波線部のノダ文は「メアリーは」であり、これは前文にも「メアリーの物語」という言葉の中に出てくる。「文学は政治的イデオロギーに支えられている」→『メアリー』も政治的意義が付与されている→「メアリーの物語は同時代の女性たちの状況も反映」→「メアリーは18世紀末の女性たちの

存在の不安さを反映」と連なっている。ノダ文は、それまでの『メアリー』という物語が何を表しているのかを、前文とつながりを持たせつつまとめている。

また(5)では、「デフレは貨幣的現象」→「構造政策や財政政策はある点で有効であるが、貨幣が関係しないと解決は無理」→「デフレに対抗できる政策は金融政策」と話題は連なり、これも(4)と同じくノダ文の内容は、前文までのまとめとして位置している。

このように、ノダ文の助詞「ハ」に率られる名詞句が前文の中にある場合、そのノダ文は前文までの内容とつながりを持ちつつ、それまでの内容をまとめている場合があることが分かった。

6.1.1.2 ノダ文の助詞「ハ」が率いる名詞句が前文の中にある場合

このノダ文は、具体的に次のような用例が見られた。

- (6) 特恵的貿易協定が認められるためにGATTの24条で要求する条件は次の2つである。第1に、域内の貿易自由化である。(中略)。第2に、対外差別強化の禁止である。(中略)。ある特恵的貿易協定が結ばれるとき、対外関税率を上げてはならないというものである。これは第2次世界大戦前のブロック経済が域外国への高関税を伴ったことの反省である。GATTの24条はこの2つの条件を置くことで特恵的貿易協定が、その弊害を伴わずに、将来の自由化を促進する効果をもつように期待されているのである。 (経済学)

上の(6)では、波線部のノダ文の主題は「GATTの24条」であり、これは前文の主題とは異なる。しかし、この「GATTの24条」という「ハ」で率いられた名詞句は、それ以前に既に出現しており、以前に出現した名詞句をノダ文で再度取り上げることによって、段落内にまとまりができています。

また次のようにノダ文の属する段落を超えて、それ以前の部分との関連性を持たせる場合にもノダ文は用いられていた。

- (7) 一方「新しいヨーロッパ」論の一部は、日本の「大東亜共栄圏」建設

をめぐる議論の中で好意的に受容された。カーの『平和の条件』は軍を中心として広く読まれた異例の洋書であり、(中略)政治学者・矢部貞治は、(中略)共感を示した。矢部の「最も体系的に米英の掲げる戦争目的の貧窮と荒唐無稽を摘抉してゐる」というカー理解は、(中略)「日独に好意的な英国人学者カー」の像をつくり上げた。

カーに対するこのようなイメージは、日本の戦時から戦後への体制転換においてどのように「清算」されたのであろうか。『平和の条件』は(中略)戦後安全保障問題の確かな手引書として紹介された。また、丸山真男は同書を「戦後世界の方向性のアンチョコ」と期待を込めて位置付けた。すなわち、(中略)カーの「新しいヨーロッパ」論は、戦後も国際関係の諸問題に対応する有効な指針とみなされ、(中略)戦時から戦後への体制の変化を経ても変わることなく支持され続けたのである。 (政治学)

(7)でノダ文の助詞「ハ」に率られる名詞句は「新しいヨーロッパ論」であり、前文の「ハ」に率られる名詞句とは異なる。この「新しいヨーロッパ論」という名詞句は、その前の段落で傍線部のように述べられている言葉である。さらに、ノダ文の内容はこの段落の内容だけではなく、前段落の内容も包括している内容である。つまり、ノダ文が属している段落をまとめるだけではなく、それ以前の段落の内容とも関係づけてまとめていると言える。

以上見てきたように、ノダ文の助詞「ハ」が率いる名詞句が前文の中にある場合、それは前文以前に出現したものをノダ文の「ハ」と共に出し、ノダ文が所属する段落やそれ以前の段落をまとめている。

6.1.2 段落の中央部に位置するノダ文の働き

それでは比較のために、ノダ文が段落中央に位置する場合を見る。ここで考察対象とするノダ文は全20例であるが、10例は前文にノダ文の助詞「ハ」で率られる名詞句が存在するものであり、もう10例は前文にノダ文の助詞「ハ」で率られる名詞句が存在していないものであった。

まず、ノダ文の助詞「ハ」で率られる名詞句が前文にも存在するものを用

例を見てみる。すると、以下のように前文の言い替えである場合があった。

- (8) 事前発掘調査の経費については(中略)落札した発掘調査団体との契約によって決まることになった(改正2001年法第5条、2003年法第6条)。つまり発掘調査経費は税金ではなく、契約による支払いとなったのだ。(考古学)

一方、前文にノダ文の助詞「ハ」で率いられる名詞句が存在していない場合は、次のようにそれ以前に出ている名詞句を再度用いている場合があった。

- (9) 確かにナイティンゲールはインドの貧しい農民に代わって語ろうとした。そのことを端的に示しているのが、“The People of India”(1878)と題した論文の冒頭部分である。“(中略)”と問いかけることで、ナイティンゲールは声無き無数の人々の声となり、その苦しみを英国の人々に伝え、さらに英政府に早急な改善を要求する責務を自らに課すのである。だが、ナイティンゲールが(中略)帝国主義的思想から解放されていたか否かは、(中略)考察する必要があるだろう。(英文学)

上記(9)は冒頭段落部分であるが、ノダ文の助詞「ハ」で率いられる名詞句は「ナイティンゲール」であり、これは前文には出てこず、その前の文に出てきていることがわかる。このようにノダ文によって1文～3文までまとまりをつくり、次の文では筆者のこれからの論文の目的が書かれている。

このように段落の中央部に位置するノダ文であっても、段落末と同じように前文以前と関係性を持たせているものがあつた。今までノダ文は段落末にその内容をまとめる機能があるとされてきたが、段落中であっても、段落の中央で一度内容をまとめていることが確認された。

6.3 論証型論文でノダ文が多い理由は何か

ノダ文は論証型論文において最も多く出現した。この理由を、論証型論文という論文の特徴と前節の調査・考察結果から考えてみる。

論証型論文は、複数の異なる章から成り立っており、これらの章は相互に独立している。例えば『宮澤賢治について』というテーマの論証型論文があるとすれば、「第1章 賢治の生い立ち」「第2章 賢治の幼少期」といったように1つのトピックごとに章が立てられていることが多い。さらに章の中は、例えば「賢治が生まれた時代の背景→賢治の両親→両親の仕事」などと小さなトピックが連なって成立しており、そのトピックは事実や資料からの引用、意見などが組み合わさって成り立っている。

清水まさ子(2011)では、論証型論文においては事実や先行研究、意見といった論文の構成要素の交替が検証型論文よりも多いことを述べた。つまり、論証型論文における構成要素の交替は、検証型論文よりも積極的に行われていると言える。

このような論証型論文においてノダ文が多い理由としては、1つの章の中で、小さなトピックが交替する際、その小さなトピックのまとめとして(区切りとして)、ノダ文が用いられていることが多いのではないかと考えられる。実際に今回の調査結果でも、ノダ文は段落末に来る場合でも、段落中央に来る場合でも、それまでの話をまとめる機能を持っていることが分かった。

清水佳子(1997)は「のだ」は先行文に対して結束装置として機能するという結果、後続文との間に境界を生み出し、「のだ」の次の主題は顕現しやすい」と述べた(p.60)。清水佳子(同上)は、同一主題のノダ文について述べたものであるが、今回の調査でも、ノダ文はそれまでの段落や話の内容をまとめている機能を持っていることから、同時に境界としての役割を担っていると言える。トピックがいくつも連なる論証型論文においては段落中でノダ文を用いることで、トピックをまとめつつ新たなトピックに交替させることができていると考えられる。

7 まとめ

本研究では学術論文におけるノダ文の用いられ方について助詞「ハ」に注目して調査した。その結果、ノダ文は段落最終部に位置することが多く、またノダ文とその前後文では、助詞「ハ」に率いられる名詞句は交替することが多い

ことが分かった。

さらに具体的に見ていくと、段落最終部に出現するノダ文は、段落をまとめる機能を持っていることを述べた。このノダ文の機能については既に今村(1996)でも述べられていることだが、本調査によって、それはノダ文の助詞「ハ」に率いられる名詞の交替を見ても、言えることが分かった。また、今まで段落末の締めくくりのノダ文は、「つまり」「要するに」「結局」などの接続詞とともに考えられ、その接続詞と関係が強いため締めくくりの機能があるとされてきた(今村1996)。しかし、実際に段落末に書く場合には、そういった接続詞を用いずとも、ノダ文の主題を工夫して用いるによっても、段落にまとまりを出すことができることが分かった。

それでは今まで述べてきた調査結果に、さらに今回の研究で明らかになった論文のジャンルによるノダ文出現の偏りという結果を加えて、学術論文におけるノダの使用に関して以下の提言を行う。

学術論文の中でも、論証型論文を書く場合にはノダ文は有効に活用できる。なぜなら論証型論文は1つの章が長く、その中で様々なトピックが展開しているため、ノダ文を段落末におくことで、まとまりのあるトピックが書けるからだ。段落末ほど多く用いられないが、段落中に用いても、それまでの話題をまとめあげることができる。このようなノダ文を書く際には、その直前の文の主題をノダ文の主題とするのではなく、それ以前に書かれている表現をノダ文の主題にしたり、また段落に何度も出てきた重要だと考える言葉を再度ノダ文の主題におき、今までの話をまとめるという。

今後は、実際に論文指導などでノダ文を説明するにはどのようにしたらよいか、といった実践的な調査も行っていきたい。

〈国際交流基金日本語国際センター〉

〈付記〉

本調査は、国立国語研究所の萌芽・発掘型共同研究「テキストにおける語彙の分布と文章構造」(グループリーダー：山崎誠)の一環として行われたものである。

注

[注1] …… 後文が前文・ノダ文のように全382例ないのは、ノダ文が章末に来る場合、つまり後文が続かない場合が47例あったからである。

参考文献

- 庵功雄(2000)「教育文法に対する覚書—「スコープの「ノダ」を例として」『一橋大学留学生センター紀要』3,pp.33-41. 一橋大学留学生センター
- 石黒圭(2001)「ノダの中核的機能と派生的機能」『一橋大学留学生センター紀要』6, pp.3-26. 一橋大学留学生センター
- 今村和宏(1996)「論述文における「のだ」文のさじ加減—上級日本語学習者に文の調子を伝える試み」『言語文化』33,pp.51-78. 一橋大学
- 太田陽子(2009)「意見文におけるハズダの機能と文章展開のパターン」『日本語教育』140,pp.70-80. 日本語教育学会
- 佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ(1986)『実践にほんごの作文』凡人社
- 清水まさ子(2006)「談話のジャンルと接続表現との関係—新聞の報道文とコラムを比較して」『東アジア日本語教育・日本文化研究』9,pp.55-75. 東アジア日本語教育・日本文化研究学会
- 清水まさ子(2011)「学術論文の本論における論の展開—異なる構造の論を比較して」『社会言語科学会 第27回大会発表論文集』pp.76-77.
- 清水佳子(1997)「主題連鎖と「のだ」との関連」『現代日本語研究』4,pp.47-61. 大阪大学文学部現代日本語学講座
- 霜崎實(1981)「「ノデアル考」—テキストにおける結束性の考察」『SOPHIALINGUISTICS』7,pp.115-124. 上智大学
- 田野村忠温(1990)『現代日本語文法I』和泉書院
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子(2008)「論じる行為への理解を進める論文・レポート作成支援表現集の開発」『専門日本語教育』10,pp.53-58. 専門日本語教育研究会
- 日本学術協力財団(2004)『学会名鑑』日本学術協力財団
- 野田春美(1997)『の(だ)の機能』くろしお出版
- 山口佳也(1975)「「のだ」の文について」『国文学研究』56,pp.12-24. 早稲田大学国文学会